

ONE PIECE 陸軍大将「緋熊」

くまたくま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説の陸軍大将 「緋熊」

彼がフーシャ村を訪ねたところから、物語は始まる。

ワンピースの面白いSSが最近多いので書いてみました。今のところ原作沿いですが、そのうち完全オリジナルな話になります。ワンピースの世界観が好きなので、そこで色々話を作りたいなーと思つたわけです。

多分あるけどほとんど触れられてないワンピース世界の陸軍。彼らの仕事は治安の維持と危険地帯の探索。そんな軍隊の大将として、緋熊が色々な舞台を歩き回ります。

目

次

フーシャ村にて①

1

フーシャ村。ここは小さな港村だ。

港には1年ほど前から、海賊船が停泊している。
風は東。村はいたつて平和である。

「おれは遊び半分なんかじゃないっ!! もうあつたまきた!! 証拠を見せ
てやるっ!!!」

平和な村の一角で、少年の宣言が響き渡る。少年の名はモンキー・
D・ルフィ。フーシャ村に住む、現時点ではごく普通の少年だ。そん
な彼は今、小さなナイフを片手に島に停泊している海賊船の船首に立
ち、眼下に船の持ち主である海賊たちを見下ろしながら叫んでいる。
「だつはつはつは。おう！やつてみろ。何するか知らねえがな！」

そう返したのは看板から彼を見上げる、麦わら帽子の男と海賊た
ち。ルフィの奇行は今に始まつたことではなく、子供ながらに無茶を
するこの少年が今度はどんな面白い事をするのかと彼を見ていた。
そんな彼らを見渡し、ルフィは持つていたナイフを振りかぶり——

「ふん!!」「?」

——自身の左目下に突き刺した。

「いっつつってエ～～～～つ!!!」

「バ・バカ野郎、何やつてんだア!!」

想像を超えるルフィの奇行に慌てる海賊と、自身のつけた傷を痛が
り続けるルフィ。彼らは大慌てで、ルフィの怪我を処置するととも
に、この根性のある少年のための宴の準備を始めるのだつた。

村は今日も平和である。

2

「野郎共、乾杯だ!! ルフィの根性と、おれ達の大いなる旅に!!」

ところ変わつてフーシャ村のある酒場。まだ日は高いがそこは海賊。全員が酒と食い物を楽しみ、どんちゃん騒ぎをしている。乾杯の口上こそあつたものの、彼らは酒が飲めればそれでいいのだろう。酒場のカウンターでは件の少年、ルフィイが一人の男に話しかけていた。

「なあ、シャンクス!! 見てただろ!! おれはケガだつてぜんぜん怖くないんだ!! 連れてつてくれよ、次の航海!! おれだつて海賊になりたいんだよ!!」

シャンクスと呼ばれた男。赤紙に麦わら帽子、左目に縦三本の傷跡を持つ、周りで騒ぐ海賊たちの頭は、そんなルフィイの願望に大笑いしながら答えた。

「お前なんかが海賊になれるか!! カナヅチは海賊にとつて致命的だぜ!!」

どうやらシャンクスに、ルフィイを海へ連れて行く気はないらしい。その後もいい寄るルフィにも、あきれたような彼の様子。

そんな2人に對し、酒の雰囲気か、根性を見せたルフィイの願いだから、シャンクスの仲間たちは自身の頭とは反対に大盛り上がりだ。「ルフィイ、海賊は楽しい!!」「おうともよ、氣楽にいこうぜ何事も!!」「海は広いし大きいし、何より自由!!」

そのうちの一人がシャンクスに話しかける。

「お頭、いいじゃねエか、一回くらい連れてつてやつても」

どうやら先ほどの奇行が受けたらしく、ルフィイを連れてくことに賛成するクルーも数人はいる。しかし――

「じゃあ代わりに誰か船を降りろ」

「さあ話は終わりだ。飲もう!!」

――シャンクスがそういえば、ルフィイの味方は大笑いしながら話を終わらせ、酒を飲みに離れていった。

なおもルフィイは食い下がるも、副船長の話や、酒場の店主、マキノの登場でひとまず落ち着き、シャンクスに今後の航海の話を聞きながら、肉を食っていた。もうすぐフーシャ村から離れるというシャンク

スの船に、どう潜り込むかを考えていたところで――

ギイイイイイ

――酒場のドアが開く。

そこには、この村では見たことがない、とある男が立っていた。

3

時間は少し巻き戻る。海賊船でのやり取りとほぼ時間を同じくして、フーシャ村には2人の来客があつた。彼らがきたのは村の入り口。ゴア王国へとつながる道からである。

「おお、息子よ、立派になつて…!!」

フーシャ村の村長、ウープ・スラップは、数年前に陸軍へ送り出した一人息子に泣きながら抱き着いていた。

「ちよつと、やめてくれよ、父さん、こんな場所で。大将殿もいるんだからさ…」

来客の一人。村長の一人息子、オープ・スラップは、そんな父親の様子に慌てながらも落ち着くように言う。階級は准尉。もう少しで陸軍将校と呼ばれる立ち位置へ到達する、陸軍期待の若手である。

「おお、これは申し訳ない、大将殿。覚悟はしておつたが数年ぶりの再会だからな。年に似合わずはしやいでしまつたわい。」

「ちよつと、父さん!! 大将殿にそんな口の利き方――」

「いいぜ、オープ。今は俺たちやあ休暇中だ。無礼講で行こうぜ。」

――もう一人の来客。190cmはあろう巨躯に、ぼさぼさに伸びた黒髪。右目の上に十字の傷をつけ、腰に刀を持つた男は、目の前の親子にそう告げた。

「もう今日は父親と過ごしていいぜ。どうせお前の休暇はまだまだあるんだ。久々に親孝行でもしておくんだな。」

一見すると山賊か盗賊にでも見えそうな出で立ちと言葉遣い。しかし、コートの背中に書かれた「正義」の二文字が、彼の所属と地位を表していた。そんな彼の言葉にオープは即座に敬礼をして返す。「は!! かしこまりました、大将殿。お言葉に甘えさせていただきま

す!!」

「いや、だから無礼講でいいんだがなあ…。まあいいか。おい、村長さん。」

「なんだね？」

「この辺りに酒場かなんかはないか？せつかくの休みなんだ。今日くらい昼間から飲んだってバチはあたりやしねーだろ。」

「ふむ…。それなら港の方へ行つてみるといい。マキマという娘がやつとる酒場があるわい。」

「おお、ありがとよ。それじやあな、オープ。」

なおも直立不動で敬礼を続けるオープに声をかけ、男は村長の家をあとにする。

「…なんじやいオープ。そんなにびびつて。少し粗雑だが、頼りになりそがない上司じゃないか。」

「父さんはあの人のこと良くなきからそんなこと言えるんだよ!!あの人陸軍の生ける伝説で、あの海軍の英雄、ガープとすら渡り合つたという有名人なんだ!!せつかくの休暇だから里帰りでもしろつて言われたときはうれしかったけど、あの人もついてくるなんて聞いてなかつたんだから!!」

「ガープ!?あの男とか…。そんなにすごい男なのか。して、なぜこの村なんぞに？」

「さあ…。大将殿はああ見えて頭の回る人だから、何か考えがあるんだろうけど」

「まあよい。今日は宴だ。オープの帰郷とその榮達に!!」

「まあよいつて…。まあ大将殿のお言葉通り、今日くらいは親孝行しますかね…。」

久々の再会を喜ぶ親子。窓の外では、先ほど出て行つた大男が、ゆっくりとフーシャ村を歩いていった。

(さて、ここがフーシャ村ねえ…。原作の始まる場所であり、主人公とその恩人が過ごした村。いよいよ原作開始つてことか…。)

フーシャ村を歩く、正義の二文字を背中に背負つた男はそう心の中

で考える。

陸軍大将 「紺熊」

それが彼の現在の名前と肩書である。早い話、彼、ヒグマは転生者である。山で山賊のまねごとをしていた幼少期に前世の記憶と自身のいる世界、そして自身の最期を思い出し、なんとか回避しようとがいた結果、どういう訳かワンピース世界の警察組織にあたる、陸軍の大将にまで出世していた。

(ここ)まで長かつたなあ。まあ、今の俺なら近海の主くらい指一本動かさなくともどうとでもなるが…)

自身の本来の立場を大きく変え、転生者の基本よろしく、原作の始まりを見に来た彼だつたが、懸念することが一つある。

(俺がルフィをさらう理由もなけりやシャンクスに喧嘩を売る気もねえ。いきなり原作崩壊もいいところだが、これでなんか変わるのかねえ。)

そう、それはいきなり原作と違う流れを引き起こすキャラクターになつてしまつたことだ。

(まあ、そんなこと言つてもしようがねえか。そもそも俺がこんな立場にいる時点で、原作もくそもないだろう。とりあえず、未来の四皇様と、五番目の海の皇帝でも見に行きますかね。)

記憶はともかく、考え方は元のヒグマに影響されたのか、彼はそこまで悩むこともなく、マキノの酒場に向かつた。

5

ギイイイイイ

——酒場の扉が開く。

外にはこの村では見ないひとりの男が立つていた。

「邪魔するぜエ。ここは酒場だつて聞いたんでな。酒を売つてもらいに来た。」

先程までの盛り上がりから一転。騒いでいた海賊たちはその男の登場に静まり返つた。何人かは武器を手に取り、油断なくその男をにらみつけている。

「……めんなさい。お酒はちょうどいま切らしてます。」

そんな男たちの様子に驚いたのか、マキマは一瞬戸惑うも、店主としてそう答える。

（おー、これが今の赤紙海賊団か。さすがに粒ぞろいだねえ。それにマキマさんもかわいい。いやー、記憶の通りだ。さあ、どうしようかねえ。とりあえずは原作通りに…）

ヒグマはゆつくりとカウンターへ足を進める。

「ん？ おかしな話だな。あいつらは何か飲んでるようだが？ ありや水か？」

「ですから、今出てる酒で全部でして。」

（ここでシャンクスが話しかけてくると…。さてと。）

ヒグマはカウンターに座る、麦わら帽子の男とその仲間を見渡しながらそう考える。

「これは悪い事をしたなア。俺たちが店の酒、飲み尽くしちまつたみたいで。すまん。これでよかつたらやるよ。まだ栓もあけてない。」

ヒグマは受け取った酒ビンを大きく振りかぶり——

ドン!!!

と、その酒ビンを机に置き、シャンクスの横に座った。

「おお、こりやあ悪いね。ま、量は少ないがタダ酒だ。遠慮なくもらうとするよ。」

そうして、ヒグマはシャンクスと談笑しながら酒を飲み始めた。

「「いや、何普通に飲んでんだよ!!!」」

武器を構えた戦闘態勢のまま、赤髪海賊団は大声でツッコんだ。

「陸軍大将、緋熊ア!?」「嘘だろ、あの男が!?」「ゴッドバレーのロックス海賊団56人殺しの男だろ??」「つーかなんでお頭はそんな奴と普通に飲んでんだ？俺たちを捕まえにきたんじやねーのか!?」

カウンターから距離を取り、様子を見守る赤髪海賊団。慌てた彼らの様子に、副船長のベン・ベックマンはため息をつきながら語り掛けれる。

「落ち着け、お前ら。ここで戦闘にはならねえよ。やるならさつきのタイミングで、あちらさんが仕掛けてきたはずさ。頭が話してんだ、てめえらも飲んでろ。」

なおも警戒をやめない船員たちだが、ひとまず副船長の言う通りだと判断したのだろう。チビチビとではあるが、宴会が再開していく。（やつらにはああいつたが、今ここに奴がいる理由が俺たち以外にないのも確かだ。一体何しに来たのかねえ。もめるんならせめて酒場の外にしてくれよ、船長。）

一人、壁際に寄りかかり、葉巻に火をつけながら、ベックマンはカウンターに横並びで座る二人を見つめていた。

「赤髪海賊団船長、シャンクスとその一味ねえ。こんなイーストブルーのはずれに、お前らほどの男たちが何の用だ？」

「そりやこつちのセリフだぜ、陸軍大将、紺熊さんよ。おかげで仲間たちがおびえてしようがねえ。なんだ、おれ達でも捕まえに来たのか？」

？

わずかに霸氣を漏らしながら、両者は酒を飲む。シャンクスの横のルフィは訳も分からぬ威圧感に圧倒されているが、初めて見るシャンクスの海賊然とした様子に、少しのワクワクを覚え、そこから離れようとはしなかった。

「…いんや、俺は今日は休暇だ。部下の一人がこの村の出身なんですね。里帰りをするつてんで、観光がてら足を運んだだけさ。それに、おめーらは海賊だろ？ 陸軍の俺が捕まえなくちやいけない道理はあるまいよ。」

その言葉にようやく二人とも霸氣を収める。もめごとにならなさそうな雰囲気を察したのか、背後ではすでにどんちゃん騒ぎが再開されていた。

「たく…、度胸があるというかバカだというか。一応、軍の大将だぜ、俺はよ。もう少しビビるもんだろ、普通は。」

「いい仲間たちだろ？ まあ、今のあんたにや勝てそうなのはいねーが、いい勝負する奴らならそこそこいるぜ？」

「だから、今日は喧嘩しに来たんじゃねーってーの。」

酒場に男が一人増えただけ。宴会は盛り上がりを取り戻してきた。シャンクスからもらつた酒を飲みほしたヒグマに、怖いもの知らずなルフィが話しかける。

「おれ、ルフィ。おっさん、誰だ？ シャンクスの友達か？」

「（あのバカ…。大将にため口聞いてやがる！）」

心の中で同時に突つ込む船員たち。

（そういうや、ルフィって初対面の白ひげにため口聞いてやがったな） 目の前の少年が主人公であることに感動しながらも、なかなか今の自分には向けられぬ態度にあきれのヒグマ。

「おっさん…いや確かに十分そういうわれる年齢だがよ…。俺は陸軍の人間だ。まあ、このシャンクスって奴の何かと言われたら…。まあ飲み友達だな。」

「（いや、敵だろ!!というか初対面なのに友達なのか!!）」

またも心の中で同時に突つ込む船員たち。

「軍!?てことはじいちゃんの仲間か?!じゃあシャンクスの敵じやねえか!!」

「…そのじいちゃん、てのが誰かは知らんが、こいつらの敵は海軍。俺は陸軍だ。主な仕事は治安維持と危険地帯の探索。海賊確保は俺たちの仕事じゃねーよ。」

めんどくさそうにそう答えるヒグマに、笑いながらシャンクスは返す。

「屁理屈いいやがつて。お前が仕事にしてないだけで、陸軍だつて俺らを捕まえるだろ。治安維持が仕事なんだから。」

「じゃあ今日はたまたまお仕事はお休みだ。いいだろ？ ロジャーの処刑からしばらく、海の荒れと同じくらい陸も荒れてんだ。休んだつてバチは当たらねえ。」

そこまでいって、再び杯を合わせる。

元々のヒグマの性格が山賊思考だからか、同じ荒くれモノどうし、話は盛り上がつた。気づけば宴は夜にまで及び、どこから仕入れてきたのか、大量の酒とともに、彼らの祭りは続していく。

翌朝、ほとんどの海賊が酔いつぶれる中で、ヒグマとシャンクスはお互いの肩を抱き合いながら、大笑いしていたのだった。